

変化を迎えた

関節リウマチ

治療



新年明けましておめでとうございます。寒さの厳しい毎日が続いています。関節痛で悩まれる患者さんにとって、冬は最もつらい季節と訴える方が多いように思います。

一言で関節痛といってもその原因は外傷性の中から、痛風、感染症、自己免疫疾患など実に様々です。その中で、近年大きな治療の変化を迎えた関節リウマチについてお話ししたいと思います。

関節リウマチは、朝のこわばり、3力以上の関節が対称性に腫れと痛みを伴い、慢性的に継続して、病気の進行とともに関節の変形をきたす病気です。発病の原因は不明ですが、免疫機能の異常によって起こる自己免疫疾患の一つであり、全国に約70万人の患者さんがいると推定されています。

病気にかかりやすい年齢は20歳から70歳代と幅広く、40歳代にピークがあり、男女比では1：3と5

とやや女性に多い傾向があります。これまで、治療は薬物療法として非ステロイド性消炎鎮痛剤やステロイド、抗リウマチ薬が用いられ、外科的治療としては滑膜切除術や関節置換術が行われていました。

従来の治療では病気の進行をくい止めることは難しい状況にありましたが近年、生物学的製剤の登場によって、関節リウマチ治療は大きな変化を迎えています。生物学的製剤は現在、インフリキシマブ、エタネルセプト、アダリムマブの4剤が発売されました。これらの治療薬は、症状の劇的な改善が得られるばかりでなく骨変形の抑制作用、まれですが完治した例も報告されています。画期的な薬剤ではありますが、結核、肺炎などの感染症のリスクや、治療薬が高額であることなどの問題から、すべての関節リウマチの患者さんに使用できる薬剤でないことも事実です。

しかしながら、従来の治療で改善が得られなかった患者さんにとって治療の選択肢が増えたことも事実で、関節リウマチの痛みでお悩みの方は主治医に相談してみたいかがでしょうか。

文 那須高原クリニック

佐藤英智先生